

レッスン後、「藤後さんの戦争体験を語り米寿を祝う会」が開催されました。

5月15日

□5月15日(日)昂定例レッスンは13:00から始まりました。立川さんの体操・千秋さんのヴォイストレーニングのあと、伊藤副指揮者の指揮で「わたしの朝は海からはじまる」を約1時間かけてレッスンしました。休憩をはさんで、本並先生の指揮で「立腹数え唄」と「白樺」を練習しました。ピアノ伴奏は森二三さん。参加者は全36名でした。



□レッスン終了後15:30より「藤後博巳さんの戦争体験を語り米寿を祝う会」が開催されました。第一部「戦争体験を語る」をテーマに、50名の聴衆を前にして藤後さんに1時間半にわたって語っていただきました。



□語り部・藤後博巳は語る「私は70年前二度とこんなことはあってはならないという戦争体験をした。話したくもないような悲惨な戦争体験だ。しかし、今の日本の情勢が、“今語らねばならぬ私の戦争体験”にしてしまった。」と。「中国で二つの異なる戦争体験●満蒙開拓少年義勇軍●中国第二次国共内戦」をテーマに語られました。心に留まる発言の主なものを以下に記します。(編集子)

○私は昭和4年(1929年)生まれ。世界は不況のどん底、1931年満州事変、日中戦争(支那事変)1941年小学校6年生、私は「戦争の申し子」のようなもの、戦争の真ただ中の時代に少年時代を生きた。

○私が派遣された「満蒙開拓青少年義勇軍」について

この義勇軍で私が言いたいこと。この14・5歳の青少年の開拓義勇軍は軍隊であったこと。「片手に銃・片手に鍬(食料は自分で確保せよ)」関東軍の補完部隊。これは”死ね”ということだ。日本兵に代わる少年兵として派遣されたのだ。「青少年義勇軍」の本質は「日本児童史」の特筆すべき1項目である。少年たちが当時の国家権力によって、多くの命が奪われた事実。少年のみを兵士(の代替物)として戦地に送ったのは世界で日本だけ。ナチスでもしなかったこと。

○1945年敗戦直後からの「満州」での現地残留者の過酷・悲惨な状況について

日本関東軍・日本政府が我々を見捨てた。棄民！敗戦前に政府がソ連軍と交渉した際に、現地開拓団は残して良しと、日本政府がソ連に約束している！棄民そのもの！国策だ。国のためならどんなことでも犠牲を強いる、人間の尊厳が無視されるファシズム政治の1典型例。

敗戦当時満州に日本人155万人、(27万人が開拓団。餓死・病死・凍死78500人。3人に1人。「青少年義勇軍」8万6000人うち2万4千人死亡、4人に1人。大阪から130人派遣、藤後はハルビンへ3名で、仲間はソ満国境へ。厳しい生活の中50人が死亡、敗戦直後に2人に1人が犠牲になった！)

敗戦と同時にソ連軍に出くわした。ソ連軍は略奪・強奪・暴行の限り“たちの悪い”軍隊。奥地から開拓団が逃げのびてくる。その人たちの悲惨さ・惨めさを目撃。ソ連軍はソ満国境で暴虐の限りをした事実！少年としてソ連軍の捕虜となる。多くの日本兵が拉致されてシベリヤへ抑留！藤後少年兵は牡丹江の収容所へ連行。3日間の拉致歩行の途中に子供の死体、白骨化した日本兵の死体の列を目撃。悲惨さ・惨めさを体験。戦争がはじまると殺された人を目の当たりにする事実は15歳の少年にとって衝撃であった。敗戦によって、少年兵の誇りは打ち砕かれた。「戦争が終わってよかった」とは思わず、「これからどう生きていけばいいのか」の気持ちが心を占めた。またこの衝撃的な出来事が私の戦後の平和運動・日中不再戦の運動の原点の一つになった。「戦争とは子供も女性も特別扱いはしない。自衛隊員も一人一人が行くのではない！有無を言わせずに行かされるのだ！それが戦争である！」

牡丹江の1か月の捕虜生活で餓死寸前の栄養失調でハルビンへ。

○ハルビンでの収容者の生活

小学校が収容場所。「仏さん」が凍土の上に積まれている。焼く油が無くて。発疹チフスの蔓延。敗戦から1年の間に集中的に病死・餓死・凍死。薬がない状況での惨事。棄民によって日本へ帰るべき多くの日本人が死んだ事実。(またシベリヤへ拉致抑留された多くの日本捕虜兵が「捕虜国際法」では帰還できたものが、日本とソ連軍の密約で殺されたのが事実。)

○中華料理店の中国人が私の命の恩人！

ハルビンの収容所に戻った少年兵(訓練生)たちは生きがために仕事を探しに、藤後少年は中華料理店の中国人に雇われて命を救われた。藤後少年は中国人の新しい姿を発見し、中国人への見方を変えざるを得なかった。

○八路軍従軍について

敗戦後帰国すべき藤後少年がなぜ八路軍と出会い、従軍することになったのか？

No559 (2/5)

何故日本人の私が八路軍に行ったのか？好き好んで私は行ったのではない。当時の中国は第2次国共内戦時代。万里の長城以南は蒋介石・中国国民党、中国共産党は中国東北部・満州を支配していた。中国共産党は中国の解放は中国東北部（満州）から！と、内戦（戦争）に勝つだけでなく、物をつくる、食料、医療、教育等新しい国づくりに日本人の技術者・医者・看護婦等を協力させた。日本の少年兵は衛生兵として担架隊に従事することになった。私は日本の戦争が終わってまた内戦に駆り出され戦争することになるとは夢にも思わなかった。日本人約1万人が残留し、八路軍に加わったのではないか。当時の中国共産党は「あなたたちの力を貸してほしい、新しい国づくりの友人である」として捕虜扱いはしなかったのでは。日本人が他国の新しい国づくりに参加・協力したことは当時は稀有な出来事である。

○八路軍に参加して私の軍隊の観念が代わった！八路軍の優れた特筆：「三大規律・八大注意」という厳しい軍規を持っていた。（三大規律①上に従う②大衆のものは針一本盗ってはならぬ③戦利品は私物化してはならぬ。八大注意：①言葉遣い②売買公平③借りたものは返せ④壊したものは直せ⑤殴ってはならぬ⑦捕虜を虐待するな⑧婦人をからかうな）こんな規律を持った軍隊があった。私は思った。人民に頼った・依拠した軍隊が世の中にあったのだ！と感動する。（当時の八路軍はそうだった。当時の中国共産党への信頼感が八年間の八路軍参戦の中で培われることとなった。）

と同時に「戦争には大義名分がある。しかし戦争で人が死ぬことは本当に哀れである。若い中国兵が内戦で多く亡くなった。どんな理由があろうが人は殺したくない！殺してはならない！あくまで話し合いで物事は解決すべきである。今の中国は（いろいろ言われているが）そのような犠牲の上で成立しているのだということも事実である」と思う。

○私と音楽の出会い

牡丹江の捕虜収容所でのソ連軍の男声合唱のメロディを聞いた時の感激！なごやかなハーモニー、世の中こんな素晴らしい歌があるのか！と思った。（軍歌や流行歌しか知らない少年が）

今まで「死ぬ」ことばかり考えていたのが、死ぬことをやめて、こんな歌を仲間たちと歌いたい。この経験が今の私のうたごえ運動に結びつく。「歌は平和の力・武器」が私のロシア民謡を愛する根底にある。歌は人を変える！解放軍のなかでこの歌に対する思いが増幅される。戦争勝利のために兵士たちを勇気づける歌が歌われる。中国時代にも中国の歌が私の中にもある。

○八路軍の「日本人の留用」について

軍国主義に凝り固まった抑留された日本人が八路軍と出会って考えが変わっていく。特に日本の技術者の協力が評価される。また目にした八路軍の姿、差別のない兵士の態度に接して、八路軍への偏見がなくなっていった。マルクスやレーニンやでない「思想的に教育する」という強制はなかった。

○日本に帰って来て

歓迎されるべき帰還人に日本政府は冷たかった。私は帰国後3年間就職も出来ず、差別と偏見の中で暮らした。幸い民主団体の仕事に就いた。

○最後に

昨年戦争法が可決されて日本は戦争の方向へ行こうとしている。あの忌まわしい戦争体験者の最後が私たち87歳・最後の生き残りの立場で訴えたい！戦争の悲惨さを！平和憲法の尊さを！そして憲法9条の大事さを！

（合唱団「昴」のホームページに「藤後通信」がLINKしてありますのでクリックしてください。）

第2部「米寿を祝う会」

17:30より興隆園に場所を変えて藤後博巳さんの米寿を祝う会を行いました。参加者は45名でした。男声合唱団昂・石橋副団長の司会のもと、乾副団長が乾杯の音頭をとり、数えの88歳を迎えられる藤後さんのめでたい米寿を祝い、なごやかな祝宴となりました。長いお付き合いをしていただいております千秋団長・本並先生・吉本コスモス団長・衣川洋一関西紫金草合唱団団長・・・多くの方々のお祝いの挨拶をいただきました。



生死の縁をさまよった青春

藤後博巳さん（1929年生まれ、大阪府富田林市在住、日中友好協会大阪府連顧問）は14歳で満蒙開拓青少年義勇軍に入隊し、敗戦後は中国の八路軍に従軍。日本の侵略戦争によって、生死の縁をさまよった青春時代を語っていただいた。



藤後 博巳
（とうご ひろみ）さん
日中友好協会大阪府連合
会顧問



14歳で義勇軍へ

高等小学校卒業と同時に1943年（昭和18）3月、満蒙開拓青少年義勇軍郷土大阪中隊に入隊。高等小学校は2年制で、修了時は14歳。満蒙開拓青少年義勇軍は「満州国」への日本人入植を進めるため、また失業対策として、高等小を卒業した次男、三男を送るという国策だった。茨城県の内原訓練所で1年間基礎訓練を受け、南満州の昌図訓練所へ。まもなく、大阪中隊の約130人の中から藤後氏を含む3人がハルビン郊外の、開拓団幹部を養成する嚮導訓練所に派遣された。「これが生死を分

ける分岐点だった」。大阪中隊はソ満国境地帯に送られ、約50人が病気や飢餓で亡くなった。

牡丹江へ連行され

満州に渡ってわずか1年半、1945年8月9日、ソ連軍がハルビン市内を空爆。まもなく終戦となり8月末、訓練所にソ連軍が進駐してきた。ハルビンにいる日本人男性は根こそぎソ連軍に拘束され、約200名離れた牡丹江の捕虜収容所へ連行される。途上、初めて同胞の死を目にしショックを受ける。餓死したのか殺されたのか、開拓団の幼子3人の遺体にムシロが被せられていた。牡丹江市内は激戦で破壊しつくされ、路上には戦死した兵士の遺体がそのまま残されていた。

生は兵士ではなく未成年だったためシベリア抑留は免れた。だが、藤後氏は約1カ月の収容所生活で瘦せ衰え、担架で担がれハルビンへ戻る。ハルビンの元訓練所は大難民収容所と化し、奥地からの引揚者で満杯。極寒の地で食料もないため、帰国までの約1年間で約3千人が亡くなった。元訓練生らは生き延びるために、街に出て仕事を探した。藤後氏は親切な中国人の中華料理店で働くことができた。

東北から海南島まで

1946年8月、国際赤十字社の斡旋で日本人の帰国が始まり、分散していた元訓練生も集結して帰国の準備に入る。ところが国共内戦下、国民党軍が送還中の日本人青年を拘束し戦力を増強したため送還が中止となる。やがて元訓練生は

八路軍（現人民解放軍）に拘束される。4万8千人余りの日本人が「留用」として新しい国づくりに協力させられた。うち8千人以上が八路軍で、他は医療、鉄道、航空、映画関連などで働く。

藤後氏も八路軍の担架隊に従軍。凍傷を負い、完治後は自動車部隊で約8年間、東北から華北、華南に従軍し、最後は海南島解放作戦に参加。その中で中国革命の意義も認識するようになる。

日本人帰国の再開が発表されたのは新中国成立後の1952年。1955年、11年ぶりに天津港から帰国した。両親は息子が生きているとは思わず、仏として祀っていた。「生きて帰って来れたのは運と若さのおかげ。戦争は二度と繰り返したくない」。そんな思いから日中友好や戦争体験の語り部で活躍している。